平安朝物語の複層構造による長編化への胎動

――最古の〝二部構成・並びの章・つなぎの章〟構成の『篁物語』――

安部清哉

論文要旨

平安時代前期の成立と解釈される『篁物語』における「複層構造」、即ち二部構成および「並び」の小話と「つなぎ」の小話という複層的構造について検討し、『宇津保物語』『源氏物語』との類型性について指摘した。『篁物語』は、前半と後半との2部構成、8章立て（前半5章、後半3章相当）、全23段落という構成を成す。前半と後半とは、主人公と主題とを同じくするものの、それぞれ独立した物語である。第Ⅰ部（前半）の中には、前後の場面（段）から独立した言わば「並びの物語」がある（「兵衛佐横恋慕譚」）。その並びの小話を除外しても第Ⅰ部のストーリーはほぼ成立する。前半（第Ⅰ部）と後半（第Ⅱ部）とは、「主人公」以外で共通している「妹の亡霊譚」部分によって接続されている。つまり、「妹亡霊譚」は、第Ⅰ部と第Ⅱ部との言わば「つなぎの場面」となっていることがわかる。すなわち、『篁物語』は、〝二部構成（複数部構成）で、並びの段、および、前半と後半とを楔型につないでいる「つなぎの段」をもっている複層構造〟を成している複雑な構成を成す最古の文芸作品であることがわかる。

その成立時期を考慮すると、二部構成を成す点では『宇津保物語』よりも古く、『源氏物語』が複数部構成（三部構成）で、かつ併行する帖（巻）（「紫上」系と「玉鬘」系との併存他）をもち、また併行して進む並びのストーリーを持つこととも類似し、それよりも古いことになる。『宇津保物語』とは原作者（有力候補・源順）の関係から、また、『源氏物語』とは『源氏物語』への影響（夕霧像の造形ほか）という点で、これら二作品の構造との詳細な比較が今後必要である。

キーワード【篁物語、『源氏物語』への影響、〝並びの物語〟、〝つなぎの物語〟、2部構成】

1　はじめに
2　『篁物語』の段落構成と物語の構造
3　『篁物語』の各段落と章段構造
4　場面ＡＢＣｄｅの着想の前後関係
5　おわりに
【参考資料】『篁物語』の章段構成　全文（２０２２年版）

1　はじめに

平安時代前期に原型部分が成立したと解釈される『篁物語』における物語の構造には興味深い複雑な構造が見られる。本稿では、その二部構成で、言わば「並び」の小話と「つなぎ」の小話という複層的構造について検討し、『宇津保物語』『源氏物語』との類型性について指摘してみたい。

先行研究も踏まえてのこれまでの拙論の考察（【参考文献】欄参照）によって、『篁物語』は、前半・後半の2部構成、8章立て（前半5章、後半3章相当）、全23段落という構成になっていると解釈された（**【表1】**参照）。

◎2部―8章―23段構成

部――2部構成（第Ⅰ部・第Ⅱ部）、

章――8章構成（第Ⅰ部内は第1章～第5章の5章構成、第Ⅱ部内は第6章～第8章の3章構成）

段――23段構成（各章内をさらに下位に細分して次のように23段とした。）

第1章＝4段、第2章＝5段、第3章＝2段、第4章＝4段、第5章＝1段、第6章＝3段、第7章＝2段、第8章＝2段

下位区分の段（章段的な側面ももつ）の設定の大きな目安としては、まずは、次の2つの観点での相違が重視された。

（1）贈答歌（単独歌の場合もあるが、3首・5首による場合も含む）を物語の個々の一場面の結び（終り）部分に据えて構成されている場面（段落）

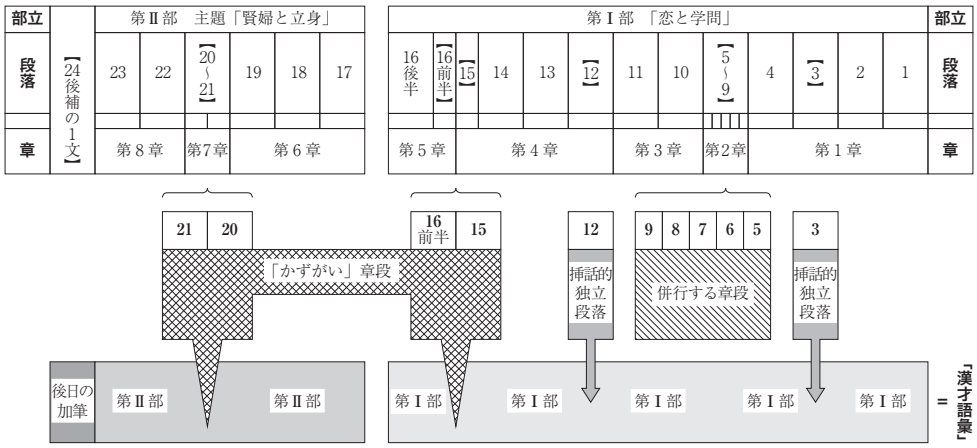
（2）会話・発話を中心として展開されている場面（段落）、ないし、説話の展開部（例えば、冒頭部や終結部、また、場面転換部）などでいわゆる「地の文」を中心にして記述されている部分

この2点によって文章が大きく異なっており、外形上・表面上（和歌、会話、地の文など見た目での区別）でも確認できる特徴でもある。実質的には、物語の場面などの内容と極めてよく連動しているものであった。

前半と後半は、主人公と主題とが共通するものの、それぞれ独立した物語である。第Ⅰ部（前半）の中には、前後の場面（段）から独立した言わば「並びの物語」（「兵衛佐横恋慕譚」）がある。その「並び」の小話を除外しても第Ⅰ部のストーリーはほぼ成立する。

また、前半（第Ⅰ部）と後半（第Ⅱ部）とは、共通する「主人公」のほか、「妹の亡霊譚」部分によってつながりのある物語として関連づけられている。つまり、「妹亡霊譚」は、第Ⅰ部と第Ⅱ部とをかすがいのように接続する言わば「つなぎの段」となっている

【図1】『篁物語』の章段構成＝2部8章段23段落＋追記1文
――二部構成＋併行章段＋「かすがい」章段＋挿話的章段



ことがわかる。

すなわち、『篁物語』は、〝二部構成（複数部構成）で、並びの段、および、前半と後半とをかすがい型につないでいる「つなぎの段」をもっている複層構造〟を成している複雑な構成を成す最古の文芸作品であることがわかる。そして、そのような構造は、『宇津保物語』『源氏物語』とも類似していることを指摘できる。相互の影響関係が問題となる。

2　『篁物語』の章段構成と物語の構造

2―1　〝2部構成＋つなぎの場面＋並びの場面〟

『篁物語』は、前半後半2部構成、8章立て（前半5章、後半3章相当）、全23段落という構成を成す。

この構成の内部構造をさらに詳しく検討していくと、23の段落は、結論的にまとめて示すと、次のような興味深い構造を相互に形成していることが見えてくる。

○第Ⅰ部のテーマと第Ⅱ部のテーマとは、内容的に連続したもので、ひとつの『篁物語』として一貫した主題と、相互に関連した設定（主題の発展性、人物の相互関係や対称的配置など）が認められる。

○第Ⅰ部と第Ⅱ部とに共通しているとみなし得る、物語全体の

贈答歌／会話・心話の多い展開の段	**篁の呼称（「せうと（兄）」と「男」の相補分布）**	**【漢学・漢才の語彙】は呼称「男」とほぼ連動。**	**第Ⅰ部で呼称「せうと」（非「男」）と【漢才の語彙】とがほぼ相補分布。「かく」「かかる」：歌の後に力系指示語あり。**
会話・心話多い		【才・書・読む・博士・大学・読む】	
贈答　5首	男 3 例	【文の点・角筆】	**「かく」**
贈答　2首	男 1		**挿入的段落**（「十列・類纂」的「冬の月」＝川口久雄）**「かく」**
贈答　3首	男 2／【「篁」1 父主】	【書 3・読 む 2・教 ふ 2・角筆・博士・点文】	●会話・心話直前に話者名を直示する段〔父ぬし「あやしく」〕 **「かく」**
冒頭は地の文、後半は会話・心話	**せうと 2**		**並びの段**（『伊勢物語』四十一段、身分の異なる男二人＝安部）
贈答　2首	**せうと 1**／【「篁」自身】		**同上**
贈答　3首、会話・心話の多い展開	**せうと 2**		**同上**
会話・心話の多い展開	**せうと 3**／「男」1 兵衛佐		**同上**
会話・心話の多い展開	**せうと 1**		**同上**
贈答　3首	**せうと 1** ⇒男 1	【書・内侍】	**「かく」**
贈答　2首		【書読む心地もなし】	＊妹と関係し懐妊して妹が「書読む心ちもなし」になると、十六段で妹が死んで篁が「法華経を書く」まで「漢才語彙」は現れず、学問から離ていくことを象徴的に描き出している。 **「かく」**
贈答　2首	**せうと 2**		**挿入的段落**（「橘の実三つ」＝典拠『蒙求』「陸続懐橘」＝仁平道明）
贈答　2首	男 1／【「男」1 父主】		**「かかる」**
贈答　3首			
贈答　2首			2 つの部のつなぎ的段（『遊仙窟』阿部俊子、『万葉集』四 741「夢の逢ひは苦しかりけりおどろきて掻き探れども手にも触れねば」平野由紀子氏。『万葉集』十二 2914「愛しと思ふ我妹を夢に見て起きて探るになきが寂しさ」中村祥子氏、招魂儀式＝中村祥子氏（何らかの典拠あるか？）、『伊勢物語』三十九段安部）
地の文	**せうと 2**		招魂儀式＝中村祥子（**何らかの典拠あるか？**）
地の文	男 1（呼称「男」で「法華経を書き」があり、十六段の最初の原稿か？）	【法花経を書き】	
地の文		【文（漢詩）・作る】	典拠（三の君応婚譚『孔子家語』仁平道明）
会話・心話の多い展開			
会話・心話の多い展開	篁 1（地）	【文の帙・文巻】	典拠（裾を引く新枕場面『世説新話』中村祥子）
和歌　1首			（第Ⅰ部の亡霊譚を承ける）
贈答　2首	男 1		（第Ⅰ部の亡霊譚を承ける） ●会話・心話部分の直前に話者名を直示する段〔大臣『あやし』、妻「ー」、男「ー」〕
地の文	男 1・篁 1（地）	【才学】	（末娘（三女）致福譚）
地の文		【大学の生・才】	典拠（『伊勢物語』四十段、安部）
地の文		【文・作る】	◆後日の追記か（彰考館本甲・乙ともに直前に 2 文字の空白と、改行部の下部に 1 文字分の余白あり）

【表 1】『篁物語』の段落構成　安部（2019 に 2023 加筆）

上位区分 前後２部	中位区分 (5 章+3 章)	下位区分（23 段）	３テーマ別分類『漢才（第Ⅰ・Ⅱ部）・兵衛佐・亡霊譚』＋【漢学語彙】	本文の該当段落の「はじめ～終わり」部分	歌物語的段落／説話的段落で二分した場合
第Ⅰ部	**第一章**	**一段**（序段）	Ⅰ【才・書・読む・博士・大学・読む】	「親の～読ませける。」	(一) 歌物語的段落の前部
		二段「妹の家庭教師」	Ⅱ【文の点・角筆】	「この男～けうとくなかりけり。」【この男＝指示詞人物】	
		三段「師走の月夜」	Ⅲ◇〈挿入的段落〉時節「師走のもちごろ」	「師走の～うそぶきありきけり。」【師走＝月日時明記】	
		四段「せうとの懸想」	Ⅳ【書３・読む２・教ふ２・角筆・博士・点文】	「さて、《明日に》～作りかへる。」【さて＝接続詞】（あした、の位置不審）	
	第二章	**五段**「如月初午稲荷詣　1」	(1)「兵衛佐横恋慕譚」（五段～九段）の序段	「さて、この女願ありて如月の初午に～道中に去にけり。」【さて＝接続詞、如月の初午＝月日時】	(二) 説話的段落　（中間部＝「兵衛佐横恋慕譚」前半・後半あり）
		六段「如月初午稲荷詣　2」	(2)	「さる程に～ゐて去ぬ。」【さる程に＝接続詞】	
		七段「兵衛佐の懸想文と和歌の贈答）」	(3)	「この佐、人をつけて、（あしたに文あり。～）～又もあひなん」【このすけ＝指示詞】	
		八段「兵衛佐の消息と篁の妨害」	(4)	「また、これをれいの童、もて来たり。～と思ひ居り」【また＝接続詞】	
		九段「篁・妹口争い」	(5)	「この兄、例のごと～入りにけり。」【このせうと＝指示詞】	
	第三章	**十段**「兄・妹心通ひ」	Ⅴ【書読み・内侍・書・教ふる】	「例の書読みに～久しくも語らはずあり。」【例の＝指示詞】	(三) 歌物語的段落の後部
		十一段「妹懐妊」	Ⅵ【書・読む】「書読む心ちもなし。」（漢学語彙ここで一旦途切れ第Ⅰ部最後十六段「法華経を書き」で再び現れる）	「されど、いかでか～書読む心ちもなし。」【されど＝接続詞】	
	第四章	**十二段**「春の橘」	Ⅶ◇（挿入的段落）・時節「春のこと」（呼称「せうと」段落）	「例の、さはりせず～（歌）～うつらざりけり」【例の＝指示詞】	
		十三段「娘の幽閉」	Ⅷ（妹への継子苛め譚的部分）	「かかることを～泣きあへりけり。」【かかること＝指示詞】	
		十四段「妹の悶死」	Ⅸ（妹への継子苛め譚的部分）	「夜あけにければ、曹司に帰りて、～泣きまどへどかひなし。」	
		十五段「妹の招魂と亡霊」	㋐**（妹亡霊譚）**【Ⅰ部・Ⅱ部のつなぎ的段】	「その日のようさり～夜の明けにければ、なし。」【その日＝指示詞】	
	第五章	**十六段の前半**（葬送・招魂・亡霊・法要）	㋑**（妹亡霊譚）**＝〔Ｘの併行内容の後日追記か？〕	「親は捨てて～四七日は、とき〴〵見えけり。」	
		十六段の後半（法華経供養・四十九日・後日譚）	Ｘ【法華経を書き】＝〔㋑の旧態か？〕	「この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法花経を書きて、～一人なん、有りける。」	
第Ⅱ部	**第六章**	**十七段**「漢詩献呈」＝第Ⅱ部の「序段」	①【文（漢詩）・作る】	「時の右大臣の～大学へ入りにけり。」	(1) 説話的段落
		十八段「三の君婚姻受諾」	②	「殿に帰へりて、～よき日して呼び給ふ。」	
		十九段「新枕と三日の儀」	③【文の帙・文巻】	「御消息ありければ、～具し給ける。」	
	第七章	**二十段**「亡霊譚　（続）」	㋒**（妹亡霊譚）**【Ⅰ部・Ⅱ部のつなぎ的段】	「さて、この頃、～泣きをりける。」【さて＝接続詞】	(2) 歌物語的段落
		二十一段「新妻との問答」	㋓**（妹亡霊譚）**【Ⅰ部・Ⅱ部のつなぎ的段】	「久しう来ねば、大臣殿、～と言ひける。」【七日＝月日時】	
	第八章	**二十二段**「篁出世話」・「末娘致福譚」	④【才学】	「この男は～文作る人は。」【この男＝指示詞】	(3) 説話的段落
		二十三段「回顧」＝学生評と新旧の時世対比	⑤【大学の生・才】	「今の人～　文作る人は。」	
		後補●二十三段の最後（彰考館本で２文字分空きの後の１文）	⑥【文・作る】	「■■又あらじかし■かように思ひて文つくる人は。」【■＝余白】	

主題を担っている段落がある。＝＝後述のAの部分「漢才とその伝承」

○それとは別に、第Ⅰ部内に、第Ⅰ部の前後の段落（場面）とは、（ほぼ）独立していると見ることが可能な、言わば、「並びの段落（場面）」*がある（＊＝第Ⅰ部の主題部に対して併行して展開している、言わばワキのストーリーがある）＝＝後述のCの部分「兵衛佐横恋慕譚」

○第Ⅰ部と第Ⅱ部とをつなぐ役割を担っていると解釈できる「つなぎの段落」がある。＝＝後述のBの部分「妹亡霊譚」（第Ⅰ部、および第Ⅱ部でのその続編部）

すなわち、ひとつの視点から一貫したテーマのもとに創作された物語であり、それが、独立した2部構成で、かつ、その2つを言わば楔型につないでいく「つなぎ」の場面をもち、さらに、第Ⅰ部については「並び」の場面をもつ創作物語であると、位置づけられる。

物語の構造上の特徴＝〝2部構成＋つなぎの場面＋並びの場面〟

本稿では、具体的にそれぞれの部分を提示してみることを、第一の目的とする。

ところで、このような構造をもつ物語は、平安時代までの作品では、おそらく『源氏物語』くらいしかみられない。『源氏物語』はⅡ部ではなくⅢ部構成であるが、複数部構成という点でいま同類と見なしておく。また、「紫の上」系統と「玉鬘」系統との併行する巻巻があることは知られている。さらに、全体の帖（巻）の中で相互のつなぎの役割を担っているような巻がある。

また、『宇津保物語』も、二部構成的であるという点では該当するかもしれない。

現在、『篁物語』の成立時期は、『源氏物語』以前である蓋然性が高いことを考慮すると、右のような複雑な構造をもつ平安物語としては、『篁物語』が日本で最古の複層構造をもつ和文物語作品である可能性が高いことになる。

2―2 『篁物語』の主要3場面と挿入的小話2話

『篁物語』における23段の構造を具体的に示していくことにする。**【表1】**は、23段の構造とそれを形作る23の章段の特徴を示したものである（安部（2018）に加筆補訂）。これまでの拙論での考察から見ると、その23章段の中は、その物語の内容から、大きくは次のA、B、C、c、dに分類できる。

○『篁物語』の構造

(1) 複数章段からなる一続きの物語

A「「漢学・漢文の学」の教養譚」（第Ⅰ部および第Ⅱ

部にわたる）

A―i　第Ⅰ部における「「漢学・漢文の学」の教養譚」

A―ii　第Ⅱ部における「「漢学・漢文の学」の教養譚」

B「妹亡霊譚」（第Ⅰ部および第Ⅱ部の続編部）

C「兵衛佐横恋慕譚」

⑵　ひとつ章段からなる挿入的小話と解釈できる章段

d「師走の月夜」章段

e「春の橘」章段

このうち、⑵としてまとめた、d「師走の月夜」章段、e「春の橘」章段は、ひとつの章段からなる挿入的小話と解釈できる章段である。それをひとまず除外すると、複数の章段にわたっていて主要な章段はABCの部分とみなすことができる。

2―3　A「「漢学・漢才」の教養譚」（第Ⅰ部・第Ⅱ部）の特徴

上記のABCのうち、Aに関わる場面は、他のB、C、d、eの部分の挿入によって、途切れ途切れ、飛び飛びになって現れているが、そのAの部分の方には、そこにのみ現れる次のような「漢才」に関わる類義語彙が共通して現れている。

第Ⅰ部　⑴「才のかぎりしつくして」「書（ふみ）読ません」「読ませける」「角筆して」（「才」は漢学の学才である）

⑵「書読ませざりければ」「書かき集めて」「角筆して」「物＊の書は」【＊原文「初の書」】「読み聞きてよろづの書は」

⑶「例の書読みに、」「親は書を教ふるなりけり。」

⑷「書読む心ちもなし。」

⑸「法華経を書きて」

第Ⅱ部　⑹「文おもしろく作りて」「文の帙取りて」「文巻を奉れば」

⑺「才学はさうにも言わず」「才」「文作る人は」

これらの語彙は、B「妹亡霊譚」、C「兵衛佐横恋慕譚」、d「師走の月夜」章段、e「春の橘」章段には、一切、一度も使用されることがない、という特徴がある。注目される語彙の出現傾向であり、これらの語彙が現れる章段（後述）と、そうでない他の章段（B、C、d、e）とには、何らかの構想段階、あるいは、執筆段階での相違があったものと推定される。加えて、Aに属する章段での篁の人称は基本的に「男」であるが、一方、人称「兄」はA以外の他の章段に現れている、というように、人称での使い分けが認められる（一部、説明可能なその例外事例はある）。

Aに属する章段だけをつないで配列して読んでも、第Ⅰ部、第Ⅱ部それぞれ、ほぼひとつの物語として遜色なくつながって読むことができる。また、それらだけでも、「漢才の伝承」を主題とする物語という点では、全23章段のままの現在の作品と同様に、第Ⅰ部と第Ⅱ部の2部構成にて、ひとつの同じ主題を担う『篁物語』という作品として同じように理解可能である。

さらに、A以外のB、C、d、eに属する章段に、漢籍などでの典拠が指摘される章段が多く見られるが、Aにはそれが少ない、という傾向も指摘できる。

これらのことから総合的に解釈すると、このAの章段が、『篁物語』の構想における初期構想（第一次構想）段階の姿を投影している蓋然性が高いと解釈される。

3　『篁物語』の各段落と章段構造

ここでは、具体的にA、B、Cに属する章段をつなげて示すことにしたい。また、d、eについても該当章段を提示する。

A「漢学・漢文の学」の教養譚」に相当する章段が中心部分であり、もっとも長い部分であるが、A以外に属する章段を抜き取っても、中心的ストーリーにも主題にもさほど大きな欠落を示すことなく、ひとつの物語として成り立っていることに注目してほしい。

なお、表記上の凡例は、本論末尾に掲載しておく（安部（2018）も参照）。

＊＊＊＊＊

3―1　「「漢学・漢文の学」の教養譚」（第Ⅰ部と第Ⅱ部）

A「「漢学・漢文の学」の教養譚」（第Ⅰ部および第Ⅱ部にわたる）

A―i　第Ⅰ部における「「漢学・漢文の学」の教養譚」

■第Ⅰ部　◆第一章

○　一段（序段）【会話・心話での展開】

親の、いとよくかしづきける、人のむすめ、ありけり。

女のする**ざえ**【才】のかぎりしつくして、今は

『**書**【書物・漢文】**読ません**』【親】とて、

『**博士**にはむつまじからん人をせん』【親】

とて、異腹の子の、**大学の衆**にてありけり、異腹なりければ、うとくて、

「あひ見ず」【妹】

などありけれど、

「知らぬ人よりは」【親】

とて、すだれ越しに、几帳たててぞ、**読ませける**。

○　二段　（「**妹の家庭教師**」）　贈答　**5首**

この男、いとおかしきさまを見て、すこし馴れゆくまゝに、顔を見え物語などもして、**文のて**【点カ】といふものを取らせたりけるを、見れば、**かくひち**【角筆】して、一首をなん、書きたりける。

《和歌》【篁】なかにゆく吉野の河はあせななん妹背の山を越ゑて見るべく　』

とありければ、

『かゝりける』【妹】

と心づかいしけれど、

『なさけなくやは』【妹】

とて、

《和歌》【妹】妹背山かげだに見えでやみぬべく吉野の河は濁れとぞ思ふ

また、**男**、

《和歌》【篁】濁る瀬はしばしばかりぞ水しあらば澄みなむとこそ頼み渡らめ

女、

《和歌》【妹】淵瀬をばいかに知りてか渡らむと心を先に人の言ふらん

男、

《和歌》【篁】身のならむ淵瀬も知らず妹背川降り立ちぬべきこゝちのみして

かく言ふ程に、人にくからぬ世なれば、いとけうとくなかりけり。

＊○三段　挿入的章段「**師走の月夜**」　贈答　**2首**＝d「**師走の月夜**」章段

○　四段　（「**せうとの懸想**」）　贈答　**3首**

さて、あしたに、久しく**書読ませ**ざりければ、

父ぬし、「あやしく篁が見えぬかな」【父主】

と言ひて、呼びにやるに、**男**来て、れいの、**書**かき集めて**教へける**まゝになん、この女のみ心に入りて、ひがごとをのみなむ、しける。かう**教ふる**中に、**かくひち**【角筆】して、

【消息】【篁】『かやう、初の【物の】**書**は、ひがごとつかうまつるらん。このごろは、物覚えずぞや。

《和歌》【篁】君をのみ思ふ心は忘られず契しこともまどふ心か　』

返し、

《和歌》【妹】**博士**とはいかゞ頼まむ人知れずもの忘れする人の心を

又、男、

《和歌》【篁】**読み**聞きてよろづの**書**は忘るとも君ひとりをば思ひもたらん

かくて、この**男**は、**てふくみ**【手文】をぞ、常に作りかへける。

＊第二章の○第5〜9段は、「並びの章段」＝C「兵衛佐横恋慕譚」

◆第三章

○　**十段**　（「**篁・妹心通ひ**」）　**贈答　3首**

れいの書読みに、【親】『内侍になさん』の心ありて、親は【**娘に**】**書教ふる**なりけり。

文かよはしにはしゝたれど、この**兄**（せうと）、心をまどはして、思ひ出でられけり。**男**、言ふやう、

【篁】「かく思ひ出でられ、かぎりなき心を思知らずして、《**よそなる人を思ひたまへるこそ、**》つらけれ。」

《和歌》【篁】目に近く見るかいもなく思ふとも心をほかにやらば
　　つらしな

と言ひければ、

「人の御心も知らずや。

《和歌》【妹】あはれとは君ばかりをぞ思ふらんやるかたもなき心
　　とを知れ

思ひくさなや」【妹】

と言ひければ、【篁】すこし心ゆきて、

《和歌》【篁】いとゞしく君が嘆きのこがるればやらぬ思ひも燃え
　　まさりけり

かく言ひて、心はかよひけれど、親にもつゝみ、人にもさはりければ、心とけて久しくも語らはずあり。

○　**十一段**　（「**妹懐妊**」）　**贈答　2首**

されど、いかでか入りけむ、この妹の寝たるところへ入りにけり。いとしのびて、まだ夜ぶかく、出でにけり。たまさかに、這い入り〳〵たりけれど、あふことは難かりけり。常に向かひゐたりければ、夜はあはず。中〳〵に心はそらにて、

『いかにせん』【篁】

と思ひ嘆きて、

《和歌》【篁】うちとけぬものゆへ夢を見て覚めてあかぬもの思ふこ
　　ろにもあるかな

返し、

《和歌》【妹】いを寝ずは夢にも見えじをあふことの嘆く〳〵もあか
　　しはてしを

かく夢のごとある人は、はらみにけり。※**書読む**心ちもなし。

※「**書読**（ふみ）**まぬ女**」―**第Ⅰ部の女主人公のイメージ**

＊挿入的章段　◆第四章　○十二段（「春の橘」）　贈答　2首＝e「春の橘」章段

◆第四章

○　十三段　（「妹の幽閉」）　贈答　2首

かゝることを、母おとゞ聞き給て、ものの給はで、うかゞひたまひて、向かひたまひたりけるを、手を取りて、引きもてゆきて、部屋にこめてけり。これを、父ぬし聞きたまひて、のどかなりける人なりければ、

「男もかしこき者にて、女おさなき者にあらず。さしたるやうあらむな。なをゆるしたまひて、の給へ」【父主】

とありければ、

「おのが身を思ふとて、の給に」【母主】

とて、いよ〳〵鍵の穴に土ぬりて、

「大学のぬしをば、家の中にな入れそ」【母主】

とて、追いければ、曹司にこもりゐて、泣きけり。

妹のこもりたる所にいきて見れば、かべの穴いさゝかありけるを、くじりて、

「こゝもとに寄り給へ」【篁】

と呼び寄せて、物語りして、泣きおりて、出でなまほしく思へど、まだいと若くて、いたりたべき人もなく、わびければ、ともかくもえせで、いといみじく思ひて、語らひをる程に、夜あけぬべし。

男、

《和歌》【篁】かずならばかゝらましやは世の中にいと悲しきはしづのおだまき

返し、

《和歌》【妹】いさゝめにつけし思ひの煙こそ身をうき雲となりてはてけれ

と言ひて、泣きあへりけり。

○　十四段　（「妹の悶死」）　贈答　3首

夜あけにければ、曹司に帰りて、この女食ひつべきやに、ものをてかへて、もてゆかんとするに、心まどひて、足もえふみたてず。もの覚えざりければ、むつまじく使ふ雑色を使ひにて、

「たゞ今心ちあしくて、え参り来ず。その程これすき給へ。ためらひて、参らむ。」【篁】

女、穴のもとにて待つに、【雑色が】かく言ひたれば、

《和歌》【妹】誰がためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとゞめめ

取り入れず。帰りて、

「かくなむ」【雑色】

と言ひければ、かしこくして、また〳〵いきて見れば、三四日ものも食はで、もの思ひければ、いとくちおしく息もせず。

「いかゞおはします」【篁】

と言ひければ、

《和歌》【妹】消えはてて身こそは灰になりはてめ夢の魂君にあひ

そへ

返し、

《和歌》【篁】魂は身をもかすめずほのかにて君まじりなばなにかはせん

とて、よろづのことを言ひて**泣けど**、答へせずなりにければ、

「死ぬ」【篁】

とて**泣き騒げば**、声を聞きて、と【解き】あけて見れば、絶へ入るけしきを見て、まどゐ出て、ほかの家に去にけり。

親出でてのちに、ゐで、率て入りて、見れば、**死にて臥せり**。**泣きまどへど**かひなし。

◆第五章

◎十六段全体としては「葬送・招魂」および「法華経供養・亡霊譚・後日譚」＝第Ⅰ部の終段

＊「十六段の前半」は二次的段階の構想による挿入か。前後は「男」だった呼称が「兵衛佐」の章段と同じ「兄（せうと）」になっている。

○　十六段の後半（初期形態か）（「法華経供養・亡霊譚・後日譚」）＝第Ⅰ部の終段

この男、涙つきせず**泣く**。その**涙**を硯の**水**にて、**法花経を書きて**、比叡の三味堂にて、**七日のわざしけり**。

その人【妹の霊】、七日はなしはててもほのめくこと絶えざりけり。

三年すぎては、夢にも、たしかに見えざりけり。なを**悲しかりければ**、初めのごとしてなん、まかせたりける。妻にも寄らで、ひとりなん、ありける。

A「「漢学・漢文の学」の教養譚」（第Ⅰ部および第Ⅱ部にわたる）

A—ii　第Ⅱ部における「「漢学・漢文の学」の教養譚」

■第Ⅱ部

◆第六章

○　十七段（「漢詩献呈」）＝第Ⅱ部の「序段」

時の右大臣のむすめ賜へと、**文をおもしろく作りて**、内に参り給とて、御車よりとりたまふとに、ついふるまいて、奉れたぶに、取りて見たまひ、

【右大臣】「うけ給りぬ。今。家にまかりて、御返聞えん」

との給。大学に**入りにけり**。

○　十八段（「三の君婚姻受諾」）【会話・心話での展開】

殿に帰りて、御女三人おはしけり。

大君に、

「しかぐ〳〵のことなん、ある。いかに」【右大臣】

と聞え給へば、怨じて、泣きて入り給ぬ。

中君、同じごと聞え給。

三君に聞えたまふ。

「ともかくも、おほせごとにそ、従はめ」【三君】

との給へば、いと清げに寝殿作りて、よき日して呼び給。

○　**十九段**　（「**新枕と三日の儀**」）【**会話・心話での展開**】

御消息ありければ、いと悲しう、橡の、やれ困じたる着て、しりゐたる沓はきて、ふくめる、**文のち**ゝ取りて、来にけり。帳のうちに入りて、まづ、この**文巻**を奉れば、取り給はねば、**篁**さしていけば、この君、皮の帯を取りて、引きとめ給へば、とまりたまひにけり。これをかいまみて、父おとゞ、見たまひて、

「いとかしこくしつ」【右大臣】　【◉次文との二重性】

と喜びたまふ。

「出でて去なまし。いかに、人聞き、やさしからまし。**いとかしこき**ことなり」【右大臣】

と喜びたまふ。

三日の夜、いといかめしうて待ち給。たゞ童ひとりぞ、具し給ける。

〈＊かすがい的つなぎの章段　○第七章二十段・二十一段（「妹亡霊譚」）〉

◆**第八章**

○　**二十二段**　（「**篁出世話**」・「**末娘致福譚**」**の後日譚**）

この男は、若き間は、いとねんごろにあはで、ほかに夜がれなどもしけり。なり出でて、宰相よりも上になりにけり。これなん、名にたつ**篁**なりける。**才学**はさうにもいはず、山たつることもえたり顔、この国人には、たらずぞありける。このこんまうのゝこて【この子・孫（むまご）の子まで】、かく歌よまぬはなかりけり。

聞きたまはざりし姉二所は、いとわろき人の妻にて、この御徳を見給ける。いとよくなり出でければ、この三君を、また二つなくもてかしづき奉る。

○　**二十三段**　（「**回顧**」＝**学生評と新旧の時世対比**）＝**第Ⅱ部の終段**

今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。【昔の人は】たゞ、心・かたち・**才**おとり【「才を取り」】給なるべし。

3―2　C「兵衛佐横恋慕譚」――Aの本篇部分に併行する「並びの物語」――

次に、C「兵衛佐横恋慕譚」を示しておく。この5章段だけで独

立して読むことができる。また、後続の章段への影響もほとんど認められない（後続章段との設定上の若干の関連性は安部（2020）参照）。篁の人称は「男」から「兄（せうと）」へ変更されている。冒頭部も、「さて、この」をあくまで、前後とつなぐためのつなぎの挿入語句と見なせば、あたかも独立した物語の冒頭部のように始まっている。それらの点から見て、Aの本篇部分に併行する「並びの物語」と位置づけることができる。

また、その五段の前半部にある「女」に対する服装・容姿に関する描写（左記の本文波線箇所）は、平安後期の女流王朝物語に見られるような詳細な文芸的描写になっているのを認めることができるが、それは、この小品の中でも極めて例外的な異質な文章表現となっていることが見てとれる。他の部分とのこのような文体の相違は、『宇津保物語』において指摘されているその前半部と後半部とでの描写の相違と、質的によく似た差異を示していることが注目される（安部 2018・2019）。

◆第二章

○　五段（「如月初午稲荷詣　1」）（「兵衛佐横恋慕譚」の序段、以下、第九段まで「兵衛佐」の章段）

さて、この女、願ありて、如月の初午に、稲荷に詣りけり。

供に、人多くもあらで、おとな二人・童二人ぞ、ありける。おとなはいろ〳〵の袿、二人は同じ色をなん、着たりける。君は、綾のかい練りの単がさね、唐のうすものの桜色の細長着て、花染めの綾の細長をりてぞ、着たりける。髪はうるはしくて、たけに一尺ばかりあまりて、頭つきいと清げにて、顔もあやしく世人には似ず、めでたくなんありける。男の童三四人、さては、この**兄**（せうと）とぞ、ありける。ませにはあらねど、先立ちをくれて来ける。

詣でざまに困じにければ、**兄**いとおかしがりて、

「**篁**にかゝり給へ」【篁】

とて寄りければ、

「いで、いな〳〵」【妹】

と言ひて、道中に去にけり。

○　**六段（「如月初午稲荷詣　1」（兵衛佐との和歌の贈答）」　贈答　2首**

さる程に、兵衛佐ばかりの人、かたち清げにて年廿ばかりなりけるが、詣であひて、かへさに、女の道にゐたる、

「あな、くるし。かくてやは、出で立ち給へる」【佐】

もの嫉みして、男【兵衛佐】申に、

「かしは車作りて、このわたりなる木さきの屏にすへ奉らん。女の身には大王、みかどには誰をかをと」【佐】

と言ふ程に暮れぬれば、【兄】わりござがして食はせんとするに、この佐をやりすぐす。この男、休むやうにて、降りて、

《和歌》【佐】人知れぬ心たゞすの神ならば思ふ心をそらに知らな

ん

返し、

《和歌》【妹】社にもあだきねするぬ石神は知ること難し人の心をまたもおこせけれど、この**兄**、いそがして、車に乗せて、ゐて去ぬ。

○　**七段**　（「**兵衛佐の懸想文と和歌の贈答**」）　**贈答　3首**

この佐、人をつけて、

「いづくにか、率て去ぬる」【佐】

と見せければ、

「その家」【人＝童】

と見てけり。あしたに、文あり。

【消息】【佐】『神の教へ給しかばなむ、さして奉る。かの石神の御もとにて、今日あらば』

文を【女が】取り入れて見れば、この**兄**、出で走りて、

「父ぬし聞き給に。いともの騒がしう。この童はいづくから来たるに【書陵部本「来たるぞ」】。いづれのすき者の使ひぞ」【篁】

と言ひければ、

「御文は奉らせつれど、昨日いませし**ぬし**の、『いづれの使ひぞ』【兄＝篁】との給を、うちからは翁びたる声にて、『なにごとぞ』【親＝父主】などの給つれば、わづらはしさになむ、参で来ぬる」【童】

と言ひければ、

「とうめの童や」【佐】

と言ひて、またのあしたに、

【消息】【佐】『昨日の御返。たび〳〵、いとおぼつかなし。この童の、あとはかなくて参で来にしかば。

《和歌》【佐】あとはかもなくやありにし濱千鳥おぼつかなみに騒ぐところか【「こゝろか」】』

この**兄**、大学に出でにけり。樋洗童、取り入れて奉る。文をも取り、

「**大学のぬし**もふみつくる【**ぬしもぞ見つくる**】。近からん、人の家にするぞよ」【妹】

とて、

『昨日も見しかども、いさや』【妹】

《和歌》【妹】たまぼこの道交ゐなりし君なればあとはかもなくなると知らずや

見て、

『ざれたるべき人かな。うたて、まが〳〵しうもいりたるかな。いかに言はまし』【佐】

と思ふ。時【**時の**】、大納言の子なりけり。

【消息】【佐】『あとはかもなしと、誰も。道にこそゐ給へりしか。

《和歌》【佐】しば〳〵にあとはかなしと言ふことも同じ道には又もあひなん』

○　**八段**　（「**兵衛佐の消息と篁の妨害**」）【**会話・心話での展開**】

また、これを**れいの**童、もて来たり。**兄**（せうと）、道にさしあひて、

「今これより」【篁】

と言ひて、やりてけり。

「かく」【童】

など言へば、

「れいの、心肝もなき童かな。先にけしきあしう言ひけむ人にや、取らすべき。この稲荷にて、まならひものしげに思へりし者ぞや。**男**よりのものぞや。そもそも、御返」【佐】

とりてやりつ。

『御返りにくし』【篁】

と思ふものゝやうに、**兄**、出であひて、

「御文奉り給人は、夜べ男にぬすまれたまひしかば、求めにゆくを。もし、この御文給へる人とも知らず。うち率ていけ」【篁】

と言ひければ、しりへ答ゑに答へて、走りにけり。

『さもあらん』【佐】

と思ひて、文もやらずなりにけり。女、**兄**のはかりたるとは知らで、

『あやしうをとづれぬ』【妹】

と思をり。

○　**九段**　（「**篁・妹口争い**」）【**会話・心話での展開**】

この兄、**れいの**ごとあるなり。

「道あひの、知りも知らぬ人に、文かよはし懸想じ給、人の御心こそありけれ。かの人は、御妻にやがてあはせ奉らん。仲人こそよからめ。ゆるされたまはでは、不用ぞ」【篁】

など言ひければ、

「なでう、目にかつかん。いかに知りてか、ともかうも思はん」【妹】

「世を知らざらん人は、さやうにも言はでこそあらめ。見つかずの御ありさまや。心うしと。思はずなり」【篁】

など言へば、妹いとおしうて、

「なにか、目にちかざらん人を、しひも見給へと、思はん」【妹】

とて、**入りにけり**。

3―3　B「妹亡霊譚」（第Ⅰ部および第Ⅱ部の続編部）

次に、それぞれ主要部分としては独立している第Ⅰ部と第Ⅱ部とをつないでいる、「つなぎの章段」としての「妹亡霊譚」の部分を示しておく。

第Ⅰ部の十五段・十六段前半、および、第Ⅱ部の二十・二十一段が該当する。このうち、十六段前半は、十六段後半に対してやや別の文体をもっており（人称が「兄」になっているなど）、少しのちの段階に追記された蓋然性が高い箇所である。

また、これらのうち、十六段前半部分は、十六段の後半部分に対して、その人称「兄」への回帰や、四十九日供養の時間的前後関係

（「七日のわざしけり」の前に「二七日、三七日」供養の記述が既にある）から見ると、後半部よりも多少後日に追加挿入された、未整理部分である蓋然性が高い（安部（2021）参照）。

3―3―(1)　つなぎの章段の第Ⅰ部部分＝「妹の招魂と亡霊」（十五段・十六段前半）

この十六段前半のみ、前段からの「泣く・涙」表現が一度断絶してまったく現れなくなる。加えて、「男」だった呼称が「せうと」へと回帰し、変化する。葬儀・供養の表現でも、十六段後半との時間的不連続性が指摘されている（安部（2020）参照）。十六段後半に対する追加挿入部分か。

◆第四章

○　十五段　（「妹の招魂と亡霊」）　贈答　2首

その日のようさり、火をほのかにかきあげて、**泣き臥せり**。あとのかた、そゝめきけり。火を消ちて見れば、そひ臥す心ちしけり。死にし妹の声にて、よろずの**悲しき**ことを言ひて、**泣く声**も言ふとも、たゞそれなりければ、もろともに語らひて、**泣く〳〵**さぐれば、手にもさはらず、手にだにあらず。ふところにかき入れて、わが身のならんやうもしず、臥さまほしきことかぎりなし。

《和歌》【篁】**泣き流す涙**の上にありしにもさらぬ**あは**の山かへる

女、返し、

《和歌》【妹】常に寄るしばしばかりは**泡**なればついに**溶け**なんことぞ**悲しき**

といふ程に、夜のあけにければ、なし。

◆第五章

○　十六段の前半（後半部分より後段階での挿入か）（「葬送・招魂・七日供養」）＝第Ⅰ部の終段

親**はすてて去にければ**、とかくおさむることは、**たゞ、この兄**（せうと）ぞ、しける。

【◉次文との二重性】

人**は**みな**すてゆきにければ**、**たゞ、この兄**、従者三四人・学生一人して、この女を死にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん、夜な〳〵来て語らひける。

三七日は、いとあざやかなり。

四七日は、とき〴〵見えけり。

3―3―(2)　つなぎの章段の第Ⅱ部部分＝「亡霊譚（続）」「「新妻との亡霊問答」（二十段・二十一段）

◆第七章

○　二十段　（「亡霊譚（続）」）　和歌　1首

さて、このころ、妹のありし屋にいきたりければ、いと悲しかりければ、寝にけり。妹、

《和歌》【妹】見し人にそれかあらぬかおぼつかなもの忘れせじと思ひしものを

と言ひければ、かの殿にもいかにてぞ、泣きをりける。

○　二十一段　（「新妻との亡霊問答」）　贈答　2首

久しう【男】来ねば、

大臣殿、『あやし』

と思したりけり。

七日ばかりありて、【男】来たり。

「などか、見え給ざりける」【右大臣】

とのたまへば、すなをなりける人にて、ことかくして言ひければ、

妻、「いとあるべかしきことにて、あはれのことや。わがためにも、さらずはおはせめ、わいてもこそは、むかし人は、心もかたちも、さものし給ければこそ、年をへて、え忘れがたくし給らめ。さる人を見たまひけんに、言ひ知らで見え奉るよ。後世いかならん。

《和歌》【妻】あかずしてすぎける人の魂に生ける心を見せたまふらん

あな、はづかし」【妻】

との給に、

男、「なにか、それは思しめす。かくては、はてはえ知しめさじ。御魂のあるやうも見るべく、こゝろみにさへ、なり給はぬ」【篁】

とて、

《和歌》【篁】「別れなばをのがさま〴〵なりぬともおどろかさねばあらじとぞ思

出でてまかりしを、引きとゞめて、今日まで、さぶらはせたまふ。うるさしかし」

と言ひける。

3―4　ひとつの章段からなる挿入的小話d「師走の月夜」章段とe「春の橘」章段

次に、挿入的章段と言えるひとつの章段からなる一場面を取り上げる。どちらも、あたかも『伊勢物語』などの「歌物語」の一章段を読んでいるかのような構成になっていることがわかる。

3―4―(1)　d「師走の月夜」章段

この章段の「師走の月」については、川口久雄（1965）は「師走

の月」が忌むべき対象であるととらえられていたという点で、当時の「十列」的な事例を挙げる「類纂」的章段であると指摘する。

■第Ⅰ部　◆第一章

○　三段　（「師走の月夜」）　贈答　2首（末尾の「入りにけり。」は同文で合計3例も現れる（第Ⅰ部九段・第Ⅱ部十七段）が、いずれもA「漢文の学」ではない章段部分である。）

師走のもちごろ、月いとあかきに、物語しけるを、人見て、

「誰ぞ。あな、すさまじ。師走の月夜ともあるかな」

と言ひければ、

《和歌》【篁】春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける

返し、

《和歌》【妹】年をへて思ふもあかじこの月はみそかの人やあはれと思はむ　【一説＝詠み手を「人」と見る】

かく言ふ程に、夜ふけにければ、

「人うたて見んもの」【妹】

とて、**入りにけり**。

男は、曹司にとみにも入らで、うそぶきありきけり。

3―4―(2)　e「春の橘」章段

この章段における「二三」個の「橘」の実を持ち帰る説話には、仁平道明（1995）は中国の説話の典拠を指摘している。

■第Ⅰ部　◆第四章

○　十二段　（「春の橘」）　贈答　2首（人称「兄」の章段）

「れいの、さはりせず」【人々】

など、うたてあるけしきを見て、人々言ふ。

この兄も、

『いとをし』【篁】

と見て、春のことにやありけん、ものも食はで、はなかうじ・橘をなむ、ねがひける。知らぬ程は、親求めて食はせ、兄、大学のあるじするに、

『みな取らまほし』【篁】

と思ひけれど、二三ばかり、たゝみ紙に入れて、取らす。

《和歌》【篁】あだに散る花橘のにほひには緑の衣の香こそまさらめ

【消息】【篁】『これをきこしめすなればなん。』

返事に、

【消息】【妹】『御ふところにありければなん、

《和歌》【妹】似たりとや花橘をかぎつければ緑の香さへうつら

ざりけり　』

これら三段、十二段には、いわば話の典拠といえるものがある章段という点で共通点がある。漢籍等の典拠が指摘されている章段は、第Ⅰ部の初期構想部分（テーマA）よりも、むしろ挿入部や第Ⅰ部後半、第Ⅱ部の方に偏在している。

3―5　末尾の一文の異質性（安部（2021））

第Ⅱ部8章の二十三段の最末尾部に、次の一文がある。

□□又、あらじかし□かやうに思ひて、**文作る**人は。

この一文は、次のような特異な特徴がみられる。

○水戸彰考館本の甲本・乙本共に、この□□個所に2文字分の空白がある。

○同写本の改行部分（「あらじかし」で改行）の最下部にも、他の改行位置最下部には見られない不要な（余剰の）余白が一文字分ある。

○「あらじかし」の「し」の変体仮名「新」は同写本の仮名「し」（之、志）のうち、唯一例外的に「新」が使用されている。

これらのことや、安部（2018.3）での『伊勢物語』四十段での考察、安部（2021）での変体仮名の使用字母の考察とも合わせて検討すると、この一文のみは、何らかの後日の段階における挿入箇所であろうと結論づけられた。

4　場面ABCdeの着想の前後関係

章段のテーマ、ABCdeごとに、該当する章段を示してきた。「3―1「「漢学・漢文の学」の教養譚」（第Ⅰ部と第Ⅱ部）」にて、Aの次の部分だけをつないで読んでも、この物語の主題（安部（2021））に、大きな影響がなく、そこだけでも、作品を解釈可能であることは、非常に興味深い。

A「「漢学・漢文の学」の教養譚」（第Ⅰ部および第Ⅱ部にわたる）

A―i　第Ⅰ部における「「漢学・漢文の学」の教養譚」

A―ii　第Ⅱ部における「「漢学・漢文の学」の教養譚」

このAの部分が、初期構想（第一次構想）部分であると推定される。

その後、この第Ⅰ部と第Ⅱ部とを内容的に連続する話しとしてつなぐために、両方に「かすがい型」に挿入された「つなぎの章段」として、B「妹亡霊譚」（第Ⅰ部および第Ⅱ部の続編部）が着想され組み込まれたものと推定される。

そのB「妹亡霊譚」の発想と、「並びの章段」としてのC「兵衛佐横恋慕譚」の着想との、いずれが先であるか、という点は、残さ

れた作品の表現からはまだ判然としない。本文の表現をさらに検討する余地はある。

単独章段からなる挿入的小話とみなせるd「師走の月夜」章段と、e「春の橘」章段が着想された段階についても、B、Cとも含めて、その前後関係も検討する余地がある。

そのうち、d「師走の月夜」については、末尾の贈答歌直後の「かく」の使用法が、前後のAの章段とまったく同じであることを考慮すると、Aの着想段階とほぼ同時に文章化された章段であるとみなして間違いないであろう。

各場面の前後関係については、おおよそ以上のように推定される。

総合的には、本編が2部構成であり、その2つをつなぐ「つなぎの章段」があり、第Ⅰ部には併行している「並びの章段」があり、そのほか逸話的小話が2篇挿入されている構造をもっているとみなすことができよう。

平安前期という早い時期において、このような2部構成、「並びの章段」、「つなぎの章段」という複層的構造をもつ物語が着想されているということになる。複雑な構造の物語の発想として、極めて興味深い作品であることをここに指摘しておきたい。

5　おわりに

『篁物語』の章段の構造を分析してきた。

『篁物語』は、〝二部構成で、「並びの章段」、および、前半と後半とをかすがい型につないでいる「つなぎの章段」をもっている複層構造〟を成している複雑な構成を成す最古の文芸作品であると位置づけられた。

その平安前期という成立時期を考慮すると、二部構成を成す点では『宇津保物語』よりも古く、『源氏物語』が複数部構成（三部構成）で、かつ併行する帖（巻）（「紫上」系と「玉鬘」系との併存）をもち、また併行して進むストーリーを持つこととも極めて類似し、なおかつ、それよりも古い物語作品ということになる。

『宇津保物語』とは原作者（源順）との関係から、また、『源氏物語』とは『源氏物語』への影響という点で、これら二作品の構造との詳細な比較が今後必要であると考える。特に、『篁物語』『宇津保物語』の創作に関わったと考えられる、源順を含むいわゆる河原院沈倫歌人達と紫式部との関係や影響については、今後の新たな調査課題であると考える。

さらにもうひとつの課題は、『篁物語』の作者は、平安前期成立という早い時期にも関わらず、どのようにしてこのような複雑な構造を着想することができたのか、という点である。それには、短編にも関わらず下敷きとなっている漢籍（中国作品）が多く指摘されてきていることがヒントになろう。おそらく、この複層構造そのものも、中国の何らかの文学作品から学び取ったものではないかと推定される。類似構造をもつ中国作品を探索することも、残された課

題である。

＊＊＊＊

【参考資料】　『篁物語』の章段構成　全文（２０２２年版）

いわゆる前半・後半ないし第1部・第2部とも呼ばれてきた2部構成を踏襲し（本稿では、第Ⅰ部、第Ⅱ部と表記する）、また、菊田（1964）などにおける、第1部を5段、第2部を3段とする構成も踏襲しつつ、さらにその下位区分を次のように23段とした。

■部――2部構成（第Ⅰ部・第Ⅱ部）、

◆章――8章構成（第Ⅰ部内は第1章～第5章の5章構成、第Ⅱ部内は第6章～第8章の3章構成）

○段――23段構成（各章内をさらに下位に細分して次のように、23段とした。）

第1章＝4段、第2章＝5段、第3章＝2段、第4章＝4段、第5章＝1段

第6章＝3段、第7章＝2段、第8章＝2段

▲――段のうち、2次的構想部分の可能性を示す。凡例参照。

『篁物語』の本文を、具体的に、3節に示した2部（■マーク）、8章（◆マーク）、23段（○マーク）に区分して提示する。

なお、念のために付言しておけば、本作品を、他の「歌物語」と同じようにして章段分けすべきであるという意図ではない。この作品の作り手の意図と作品の構成や文章表現をより理解するための、比喩的に言えば、いわば展開図、見取り図のようなものと言えようか。

『篁物語』の本文は、日本古典文学大系本（彰考館本）をもととし、便宜的に漢字・ルビほか表記等を改めた個所がある。補助記号の凡例は下記の通りである。

補助記号　凡例

▲＝＝段のうち2次的段階での構想や挿入と考えられた部分を試論として示す。それ以外の段よりも本文を2文字下げて示してある。

◉＝＝前後の部分にほぼ同文か類似する表現があり、たとえば一次稿と二次稿との併記残存の可能性を示唆する部分。

「　」＝発話・会話部分。

『　』＝心話（心内語）部分。

〖　〗＝消息部分（その中に和歌を挟む場合もある）

《和歌》＝和歌の部分を示す。

四角の枠付け語句＝この・かく・さて・れい等。段落・場面の切り替え部分の冒頭に現れる指示詞・接続詞等および段

落・場面の終り近くの一文に現れる表現等を囲み枠で示した。他の例＝その、かかる、～ば等。

【　】＝本稿執筆者注記部分（発話・心話の主体、表記ほか補注など）。

段番号のあとの記載1「場面名」＝各章段毎に仮に場面名を付けた（例、「師走の月夜」）。

段番号のあとの記載2【贈答／発話・心話】＝歌が中心の章段では歌数を示した（贈答歌であれば贈答とした）。会話・心話を中心とした展開の章段では【会話・心話での展開】と示した。

和歌の傍線部＝贈答歌では、相互に、同語・同義語・類義語、縁語、類似する表現などが使用され、それらが密接な関係をもつ和歌であることが明確に示されている。それらの関連表現に傍線を付した。いくつかの先行研究で既に言及があり、三浦（2000）では第Ⅰ部の和歌のみを対象にして詳しく考察されている。三浦（2000）を参考としつつも傍線語彙は加除し、和歌の組合せの切れ目も三浦に従わなかった箇所がある。なお、贈答形式になっていないものでもそのような語彙の関連が認められる前後の和歌があり（井野葉子（2011）が指摘する3首）、また、同語・類義語が無い場合でも既存の和歌を媒介として、あるいは縁語の連環によってつながっている和歌（三浦（2000）に解説あり）もある。

太線部＝十四段～十六段の太線の「泣く・涙」の語彙と表現は、『古今和歌集』八二九番歌との関連が強い部分を示す（安部（2021））。

空の行＝ひとつの章段の中でも、場面展開や内容上、あるいは、文章構成上（例えば、地の文から会話中心の文章へと展開する等）、小さな区切りが認められる箇所は空行を挿入した。

『篁物語』――文章構成の解釈試案――

■第Ⅰ部

◆第一章

○　一段　（序段）　【会話・心話での展開】

親の、いとよくかしづきける、人のむすめ、ありけり。

女のする**ざえ**【才】のかぎりしつくして、今は

『**書**【書物・漢文】**読ません**』【親】

とて、

『**博士**にはむつまじからん人をせん』【親】

とて、異腹の子の、**大学の衆**にてありけり、異腹なりければ、うとくて、

「あひ見ず」【妹】
などありけれど、
「知らぬ人よりは」【親】
とて、すだれ越しに、几帳たててぞ、**読ませける**。

○ 二段（「**妹の家庭教師**」）贈答　5首

この男、いとおかしきさまを見て、すこし馴れゆくまゝに、顔を見え物語などもして、**文のて**【点カ】といふものを取らせたりけるを、見れば、**かくひち**【角筆】して、一首をなん、書きたりける。

《和歌》【篁】なかにゆく吉野の河はあせななん妹背の山を越ゑて見るべく

とありければ、
『かゝりける』【妹】
と心づかいしけれど、
『なさけなくやは』【妹】
とて、

《和歌》【妹】妹背山かげだに見えでやみぬべく吉野の河は濁れぞ思ふ

また、**男**、

《和歌》【篁】濁る瀬はしばしばかりぞ水しあらば澄みなむとこそ頼み渡らめ

女、

《和歌》【妹】淵瀬をばいかに知りてか渡らむと心を先に人の言ふらん

男、

《和歌》【篁】身のならむ淵瀬も知らず妹背川降り立ちぬべきこゝちのみして

かく言ふ程に、人にくからぬ世なれば、いとけうとくなかりけり。

○▲三段（「**師走の月夜**」）贈答　2首（**挿入章段か。冒頭は指示語も接続語もなく、月日表現（「師走のもちごろ」）で始まる。**）

師走のもちごろ、月いとあかきに、物語しけるを、人見て、
「誰ぞ。あな、すさまじ。師走の月夜ともあるかな」
と言ひければ、

《和歌》【篁】春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける

返し、

《和歌》【妹】年をへて思ふもあかじこの月はみそかの人やあはれと思はむ　【一説＝詠み手「人」】

かく言ふ程に、夜ふけにければ、
「人うたて見んもの」【妹】
とて、**入りにけり**。
男は、曹司にとみにも入らで、うそぶきありきけり。

○　四段　（「せうとの懸想」）　贈答　3首

さて、あしたに、久しく**書読ませ**ざりければ、

父ぬし、「あやしく篁が見えぬかな」【父主】

と言ひて、呼びにやるに、**男**来て、れいの、**書**かき集めて**教へける**まゝになん、この女のみ心に入りて、ひがごとをのみなむ、しける。かう**教ふる**中に、**かくひち**【角筆】して、

【消息】【篁】〖かやう、初の【物の】**書**は、ひがごとつかうまつるらん。このごろは、物覚えずぞや。

《**和歌**》【篁】君をのみ思ふ心は忘られず契しこともまどふ心か〗

返し、

《**和歌**》【**妹**】**博士**とはいかゞ頼まむ人知れずもの忘れする人の心を

又、**男**、

《**和歌**》【篁】**読み**聞きてよろづの**書**は忘るとも君ひとりをば思ひもたらん

かくて、この男は、**てふくみ**【手文？】をぞ、常に作りかへける。

◆第二章

○▲五段　（「如月初午稲荷詣　1」）（「兵衛佐横恋慕譚」の序段、以下、第九段まで「兵衛佐」の段）

さて、この女、願ありて、如月の初午に、稲荷に詣りけり。

供に、人多くもあらで、おとな二人・童二人ぞ、ありける。

おとなはいろ〳〵の袿、二人は同じ色をなん、着たりける。君は、綾のかい練りの単がさね、唐のうすものの桜色の細長着て、花染めの綾の細長をりてぞ、着たりける。髪はうるはしくて、たけに一尺ばかりあまりて、頭つきいと清げにて、顔もあやしく世人には似ず、めでたくなんありける。男の童三四人、さては、この**兄**（せうと）とぞ、ありける。ませにはあらねど、先立ちをくれて来ける。

詣でざまに困じにければ、**兄**いとおかしがりて、

「**篁**にかゝり給へ」【篁】

とて寄りければ、

「いで、いな〳〵」【妹】

と言ひて、道中に去にけり。

○▲六段　（「如月初午稲荷詣　1」（兵衛佐との和歌の贈答）」　贈答　2首

さる程に、兵衛佐ばかりの人、かたち清げにて年廿ばかりなりけるが、詣であひて、かへさに、女の道にゐたる、

「あな、くるし。かくてやは、出で立ち給へる」【佐】

もの嫉みして、男【兵衛佐】申に、

「かしは車作りて、このわたりなる木さきの屏にすへ奉らん。女の身には大王、みかどには誰をかをと」【佐】

と言ふ程に暮れぬれば、【兄】わりごさがして食はせんとする

に、この佐をやりすぐす。この男、休むやうにて、降りて、

《和歌》【佐】人知れぬ心たゞすの神ならば思ふ心をそらに知らなん

返し、

《和歌》【妹】社にもあだきねするぬ石神は知ること難し人の心を

またもおこせけれど、この**兄**、いそがして、車に乗せて、ゐて去ぬ。

○▲**七段**（「**兵衛佐の懸想文と和歌の贈答**」）**贈答　3首**

この佐、人をつけて、

「いづくにか、率て去ぬる」【佐】

と見せければ、

「その家」【人＝童】

と見てけり。あしたに、文あり。

【消息】【佐】『神の教へ給しかばなむ、さして奉る。かの石神の御もとにて、今日あらば』

文を【女が】取り入れて見れば、この**兄**、出で走りて、

「父ぬし聞き給に。いともの騒がしう。この童はいづくから来たるに【書陵部本「来たるぞ」】。いづれのすき者の使ひぞ」【篁】

と言ひければ、

「御文は奉らせつれど、昨日いませし**ぬし**の、『いづれの使ひぞ』【兄＝篁】との給を、うちからは翁びたる声にて、『なにごとぞ』【親＝父主】などの給つれば、わづらはしさになむ、参で来ぬる」【童】

と言ひければ、

「とうめの童や」【佐】

と言ひて、またのあしたに、

【消息】【佐】『昨日の御返。たび〳〵、いとおぼつかなし。この童の、あとはかなくて参で来にしかば。

《和歌》【佐】あとはかもなくやありにし濱千鳥おぼつかなみに騒ぐところか【「こゝろか」】』

この兄、大学に出でにけり。樋洗童、取り入れて奉る。文をも取り、

「**大学のぬし**もふみつくる【**ぬしもぞ見つくる**】。近からん、人の家にするよ」【妹】

とて、

『昨日も見しかども、いさや』【妹】

《和歌》【妹】たまぼこの道交ゐなりし君なればあとはかもなくなると知らずや

見て、

『ざれたるべき人かな。うたて、まが〳〵しうもいりたるかな。

いかに言はまし』【佐】
と思ふ。時【時の】、大納言の子なりけり。
【消息】【佐】『あとはかもなしと、誰も。道にこそゐ給へりしか。
《和歌》【佐】しば〳〵にあとはかなしと言ふことも同じ道には又もあひなん　』

○▲八段（「兵衛佐の消息と篁の妨害」）【会話・心話での展開】

また、これをれいの童、もて来たり。**兄**（せうと）、道にさしあひて、
「今これより」【篁】
と言ひて、やりてけり。
「かく」【童】
など言へば、
「れいの、心肝もなき童かな。先にけしきあしう言ひけむ人にや、取らすべき。この稲荷にて、まならひものしげに思へりし者ぞや。**男**よりのものぞや。そもそも、御返」【佐】
とりてやりつ。
『御返りにくし』【篁】
と思ふものゝやうに、**兄**、出であひて、
「御文奉り給人は、夜べ男にぬすまれたまひしかば、求めにゆくを。もし、この御文給へる人とも知らず。うち率ていけ」
【篁】
と言ひければ、しりへ答ゑに答へて、走りにけり。
『さもあらん』【佐】
と思ひて、文もやらずなりにけり。女、**兄**のはかりたるとは知らで、
『あやしうをとづれぬ』【妹】
と思をり。

○▲九段（「篁・妹口争い」）【会話・心話での展開】

この兄、れいのごとあるなり。
「道あひの、知りも知らぬ人に、文かよはし懸想じ給、人の御心こそありけれ。かの人は、御妻にやがてあはせ奉らん。仲人こそよからめ。ゆるされたまはでは、不用ぞ」【篁】
など言ひければ、
「なでう、目にかつかん。いかに知りてか、ともかうも思はん」
【妹】
「世を知らざらん人は、さやうにも言はでこそあらめ。見つかずの御ありさまや。心うしと。思はずなり」【篁】
など言へば、妹いとおしうて、
「なにか、目にちかざらん人を、しひも見給へと、思はん」
【妹】
とて、**入りにけり**。

◆第三章

○　十段　（「篁・妹心通ひ」）　贈答　3首

れいの書読みに、【親】『**内侍**になさん』の心ありて、親は【**娘に**】**書教ふる**なりけり。

文かよはしにはしゝたれど、この**兄**（せうと）、心をまどはして、思ひ出でられけり。**男**、言ふやう、

【篁】「かく思ひ出でられ、かぎりなき心を思知らずして、よそなる人を思ひたまへるこそ、つらけれ。」

《和歌》【篁】目に近く見るかいもなく思ふとも心をほかにやらば
つらしな

と言ひければ、

「人の御心も知らずや。

《和歌》【妹】あはれとは君ばかりをぞ思ふらんやるかたもなき心
とを知れ

思ひくさなや」【妹】

と言ひければ、【篁】すこし心ゆきて、

《和歌》【篁】いとゞしく君が嘆きのこがるればやらぬ思ひも燃え
まさりけり

かく言ひて、心はかよひけれど、親にもつゝみ、人にもさはりければ、心とけて久しくも語らはずあり。

○　十一段　（「妹懐妊」）　贈答　2首

されど、いかでか入りけむ、この妹の寝たるところへ**入りにけり**。いとしのびて、まだ夜ぶかく、出でにけり。たまさかに、這い入り〳〵たりけれど、あふことは難かりけり。常に向かひゐたりければ、夜はあはず。中〳〵に心はそらにて、

『いかにせん』【篁】

と思ひ嘆きて、

《和歌》【篁】うちとけぬものゆへ夢を見て覚めてあかぬもの思ふこ
ろにもあるかな

返し、

《和歌》【妹】いを寝ずは夢にも見えじをあふことの嘆く〳〵もあか
しはてしを

かく夢のごとある人は、はらみにけり。**書読む**心ちもなし。

◆第四章

○▲十二段　（「春の橘」）　贈答　2首（唯一会話から始まる段。呼称「兄」（せうと）は「兵衛佐」章段と同じであるが、この直前・直後は「男」である。冒頭は指示語でも接続語でもない。）

「**れいの**、さはりせず」【人々】

など、うたてあるけしきを見て、人々言ふ。

この**兄**（せうと）も、

『いとをし』【篁】

と見て、春のことにやありけん、ものも食はで、はなかうじ・橘をなむ、ねがひける。知らぬ程は、親求めて食はせ、**兄、大学のあるじする**に、

『みな取らまほし』【篁】

と思ひけれど、二三ばかり、たゝみ紙に入れて、取らす。

《和歌》【篁】あだに散る花橘のにほひには緑の衣の香こそまさらめ

【消息】【篁】〔これをきこしめすなればなん。〕

返事に、

【消息】【妹】〔御ふところにありければなん、

《和歌》【妹】似たりとや花橘をかぎつければ緑の香さへうつらざりけり　〕

○　**十三段**　（**「妹の幽閉」**）　**贈答　2首**

かゝることを、母おとゞ聞き給て、ものもの給はで、うかゞひたまひて、向かひたまひたりけるを、手を取りて、引きもてゆきて、部屋にこめてけり。これを、父ぬし聞きたまひて、のどかなりける人なりければ、

「**男**もかしこき者にて、女おさなき者にあらず。さしたるやうあらむな。なをゆるしたまひて、の給へ」【父主】

とありければ、

「おのが身を思ふとて、の給に」【母主】

とて、いよ〳〵鍵の穴に土ぬりて、

「**大学のぬし**をば、家の中にな入れそ」【母主】

とて、追いければ、曹司にこもりゐて、泣きけり。

妹のこもりたる所にいきて見れば、かべの穴いさゝかありけるを、くじりて、

「こゝもとに寄り給へ」【篁】

と呼び寄せて、物語りして、泣きおりて、出でなまほしく思へど、まだいと若くて、いたりたべき人もなく、わびければ、ともかくもえせで、いといみじく思ひて、語らひをる程に、夜あけぬべし。

男、

《和歌》【篁】かずならばかゝらましやは世の中にいと悲しきはしづのおだまき

返し、

《和歌》【妹】いさゝめにつけし思ひの煙こそ身をうき雲となりてはてけれ

と言ひて、泣きあへりけり。

○　**十四段**　（**「妹の悶死」**）　**贈答　3首**

夜あけにければ、曹司に帰りて、この女食ひつべきやに、ものをてかへて、もてゆかんとするに、心まどひて、足もえふみたてず。もの覚えざりければ、むつまじく使ふ雑色を使ひにて、

「たゞ今心ちあしくて、え参り来ず。その程これすき給へ。ためらひて、参らむ。」【篁】

女、穴のもとにて待つに、【雑色が】かく言ひたれば、

《和歌》【妹】誰がためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとゞめめ

取り入れず。帰りて、

「かくなむ」【雑色】

と言ひければ、かしこくして、また〳〵いきて見れば、三四日ものも食はで、もの思ひければ、いとくちおしく息もせず。

「いかゞおはします」【篁】

と言ひければ、

《和歌》【妹】消えはてて身こそは灰になりはてめ夢の魂君にあひそへ

返し、

《和歌》【篁】魂は身をもかすめずほのかにて君まじりなばなにかはせん

とて、よろづのことを言ひて**泣けど**、答へせずなりにければ、

「死ぬ」【篁】

とて**泣き騒げば**、声を聞きて、と【解き】あけて見れば、絶へ入るけしきを見て、まどゐ出て、ほかの家に去にけり。

親出でてのちに、ゐで、率て入りて、見れば、死にて臥せり。**泣きまどへど**かひなし。

○▲**十五段**（「**妹の招魂と亡霊**」）**贈答　2首**

その日のようさり、火をほのかにかきあげて、**泣き臥せり**。あとのかた、**そゝめき**けり。火を消ちて見れば、そひ臥す心ちしけり。死にし妹の声にて、よろずの**悲しき**ことを言ひて、**泣く声**も言ふとも、たゞそれなりければ、もろともに語らひて、**泣く〳〵**さぐれば、手にもさはらず、手にだにあらず。ふところにかき入れて、わが身のならんやうもしず、臥さまほしきことかぎりなし。

《和歌》【篁】**泣き流す涙**の上にありしにもさらぬ**あは**の山かへる本まゝ

女、返し、

《和歌》【妹】常に寄るしばしばかりは**泡**なればついに**溶け**なんことぞ**悲しき**

といふ程に、夜のあけにければ、なし。

◆**第五章**

○　**十六段**（「**葬送・招魂**」・「**法華経供養・後日譚**」）＝**第Ⅰ部の終段**（この段の前半のみ前段からの「泣く・涙」表現が一度断絶し、かつ、「男」だった呼称が「せうと」へと変化する。冒頭にも指示語や接続語はない。二重性を示す部分が２ヶ所ある。）

▲【十六段前半】

親はすてて去にければ、とかくおさむることは、たゞ、この兄（せうと）ぞ、しける。　【◉次文との二重性】

人はみなすててゆきにければ、たゞ、この兄、従者三四人・学生一人して、この女を死にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん、夜な〳〵来て語らひける。

三七日は、いとあざやかなり。
四七日は、とき〴〵見えけり。　【◉次の後半冒頭との二重性】

【十六段後半】

この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法花経を書きて、比叡の三味堂にて、七日のわざしけり。　【◉前2文との二重性】

▲その人【妹の霊】、七日はなしはてても、※ほのめくこと絶えざりけり。三年すぎては、夢にも、たしかに見えざりけり。なを悲しかりければ、初めのごとしてなん、まかせたりける。妻にも寄らで、ひとりなん、ありける。

※波線部の「ほのめく」は▲十五段の「そそめく」と妹の亡霊の描写として呼応している。共に『日本国語大辞典』での初出例は『宇津保物語』である。

■第Ⅱ部

◆第六章

○　十七段　（「漢詩献呈」）＝第Ⅱ部の「序段」

時の右大臣のむすめ賜へと、文をおもしろく作りて、内に参り給とて、御車よりとりたまふとに、ついふるまいて、奉れたぶに、取りて見たまひ、

「うけ給りぬ。今。家にまかりて、御返聞えん」【右大臣】

との給。大学に入りにけり。

○　十八段　（「三の君婚姻受諾」）【会話・心話での展開】

殿に帰りて、御女三人おはしけり。

大君に、

「しか〴〵のことなん、ある。いかに」【右大臣】

と聞え給へば、怨じて、泣きて入り給ぬ。

中君、同じごと聞え給。

三君に聞えたまふ。

「ともかくも、おほせごとにそ、従はめ」【三君】

との給へば、いと清げに寝殿作りて、よき日して呼び給。

○　十九段　（「新枕と三日の儀」）【会話・心話での展開】

御消息ありければ、いと悲しう、橡の、やれ困じたる着て、しり

ゐたる沓はきて、ふくめる、**文のちゝ**取りて、来にけり。

帳のうちに入りて、まづ、この**文巻**を奉れば、取り給はねば、**篁**さしていけば、この君、皮の帯を取りて、引きとめ給へば、とまりたまひにけり。これをかいまみて、父おとゞ、見たまひて、

「いとかしこくしつ」【右大臣】　　【◉次文との二重性】

と喜びたまふ。

「出でて去なまし。いかに、人聞き、やさしからまし。**いとかしこき**ことなり」【右大臣】

と喜びたまふ。

三日の夜、いといかめしうて待ち給。たゞ童ひとりぞ、具し給ける。

◆第七章

○▲二十段　（「亡霊譚（続）」）　和歌　1首

さて、このころ、妹のありし屋にいきたりければ、いと悲しかりければ、寝にけり。妹、

《和歌》【妹】見し人にそれかあらぬかおぼつかなもの忘れせじと思ひしものを

と言ひければ、かの殿にもいかにてぞ、泣きをりける。

○▲二十一段　（「新妻との問答」）　贈答　2首

一　久しう【男】来ねば、

大臣殿、『あやし』と思したりけり。

七日ばかりありて、【男】来たり。

「などか、見え給ざりける」【右大臣】

とのたまへば、すなをなりける人にて、ことかくして言ひければ、

妻、「いとあるべかしきことにて、あはれのことや。わがためにも、さらずはおはせめ、わいてもこそは、むかし人は、心もかたちも、さものし給ければこそ、年をへて、え忘れがたくし給らめ。さる人を見たまひけんに、言ひ知らで見え奉るよ。後世いかならん。

《和歌》【妻】あかずしてすぎける人の魂に生ける心を見せたまふらん

あな、はづかし」【妻】

との給に、

男、「なにか、それは思しめす。かくては、はてはえ知しめさじ。御魂のあるやうも見るべく、こゝろみにさへ、なり給はぬ」【篁】

とて、

《和歌》【篁】「別れなばをのがさま〴〵なりぬともおどろかさねばあらじとぞ思

出でてまかりしを、引きとゞめて、今日まで、さぶらはせたま

ふ。うるさしかし」
と言ひける。

◆第八章

○　二十二段　（「篁出世話」・「末娘致福譚」の後日譚）

この男は、若き間は、いとねんごろにあはで、ほかに夜がれなどもしけり。なり出でて、宰相よりも上になりにけり。これなん、名にたつ**篁**なりける。**才学**はさうにもいはず、山たつることもえたり顔、この国人には、たらずぞありける。このこんまうのゝこて【この子・孫（むまご）の子まで】、かく歌よまぬはなかりけり。

聞きたまはざりし姉二所は、いとわろき人の妻にて、この御徳を見給ける。いとよくなり出でければ、この三君を、また二つなくもてかしづき奉る。

○　二十三段　（「回顧」＝学生評と新旧の時世対比）＝第Ⅱ部の終段

今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。【昔の人は】たゞ、心かたち・**才**おとり【「才を取り」】給なるべし。

□□【※注】又、あらじかし、かやうに思ひて、**文作る**人は。

※注（水戸彰考館本の甲本・乙本共に、この□□個所に2文字分の空白あり。安部（2018.3）での『伊勢物語』四十段での考察とも合わせて検討すると、この一文のみは後日の別記か。）

＊＊　＊＊　＊＊

※誤植訂正＝この機会に、安部（2020）縦28頁）で「鎌倉中期」（2か所）とあるのは「中世中期」（14世紀）の間違い故、訂正しておきたい。

【補注】　初校時、『篁物語』の伝本に関する拙論（安部（2020、2021a））に関して、中村一夫（2022）での言及があることを見出したので少し触れておく。

（1）中村氏は「極めて限定的な箇所の状態を根拠にして、写本全体まで押し広げて古態性を留めると拡大解釈できるのか」（後掲①の引用参照）という。安部は「〇そのような空白を残した形態は、空白を失った形態よりも、『篁物語』という作品の、より古い段階での本文形態を留めている。」（縦27頁、傍線は引用者、以下同じ）とは書いたが言葉不足だったのだと思われる。問題としたかったのは、空白や変体仮名という「形態」を（おそらく）忠実に伝書しようとしたその書写態度・書写姿勢である。そのような書承の姿勢は末尾だけではなく、作品全体に及んでいると解釈されるものと考えた次第である。変体仮名や空白を、末尾でも忠実に書写していない書写本が（現存伝本がその「忠実」な写本であっても）、それ以外の本文全体の漢字・仮名の転記に、どれほどの忠実性や注意力を維持しようと努めているだろうか。末尾の表記から、その相違を推し量ることは許されるだろうと思う。この点については安部（2021a）「5　甲本の書写態度」も参照。

（2）また、拙論で写本を「末尾有空白系統本」「末尾有空白系統本」に2分してみたが、中村氏は「独立した系統と呼べるほどの本文の違いを相互に持っているわけではないので、「系」よりも「群」と称する方が適当ではないか」とされた。「系」（系統）と「群」という術語自体について、書誌学や本文（文献）批評の上での定義自体はいま不問として、〝系統というほどの大きな違いには当たらず、本文の微妙な異文程度は系統より下位的分類に相当する〟という趣旨と理解される。安部の2系統は、書名も各々異なる「篁物語」と「小野篁集」として書承されていることと合わせて指摘している。書写本の書名が異なることは「伝写」上の極めて重要で大きな相違と判断された。

○参考：熟語「系統」に関して＝「【写本の問題①奥書その他】写本について重要な問題の一つは書写年代と製作の事情（書写者・場所・動機目的など），および**伝写の系統**であろう。」『【講義】写本について「写本の書誌における諸問題」講師・落合博志（国文学研究資料館教授）https://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/images/H26-kotenseki02.pdf（2023年1月8日検索）

以上、重要な2点のみ触れさせていただいた。詳しくは機会を改めたい。

①中村一夫（2022）「すなわち極めて限定的な箇所の状態を根拠にして、写本全体まで押し広げて古態性を留めると拡大解釈できるのかということである。空白に対する意識のありようは説明できても、それが本文の古態性にそのまま繋がるものであるのか、後補であることを示す状態を「保存」していることが、本文そのものの古態性を示すと考えるのはいささか性急な判断ではないだろうか。」

【付記】 本稿は次の研究費による研究成果の一部でもある。日本学術振興会科学研究費2017―2019年度基盤研究（C）（基金）、課題番号：17K02785、代表：安部）

【参考文献】

石原昭平・根本敬三・津本信博（1977）『篁物語新講』、武蔵野書院
平野由紀子（1988）『小野篁集全釈』私家集全釈叢書3、風間書房
中村祥子（1995）「『篁物語』第二部の発想についての私見――『世説新語』賢媛伝とのかかわり――」『日本語日本大学』21（台湾・輔仁大学）
仁平道明（1995.12）「『篁物語』の結婚譚と『孔子家語』」『むらさき』32、後に仁平（2000）『和漢比較文学論考』武蔵野書院に再録、いま後者による。
安部清哉（1996.3）「語彙・語法史から見る資料――『篁物語』の成立時期をめぐりて――」『国語学』184
中村祥子（2006.7）「生死を隔てた邂逅――『篁物語』と「李章武伝」――」『2006年中国文化大学中日社会與文化学術検討会論文集』（台北市・中国文化大学日本語文学系所出版・発行）（招魂の儀式のこと）
中村祥子（2007）「『篁物語』における三の君結婚というモティーフ（副題略）」『日本語日本文学』32（台湾・輔仁大学）
中村祥子（2009）「古今歌と『篁物語』――八二九番歌から紡がれた物語――」工藤進思郎先生退職記念の会（編）『工藤進思郎先生退職記念論文・随想集』工藤進思郎先生退職記念の会（「泣く」「涙」表現との関係）
安部清哉（2010.1）「『篁物語』の井野葉子氏「『源氏物語』浮舟巻での引用」説補強ならびに祖形小考」『古典語研究の焦点――武蔵野書院創立90周年記念論集』、武蔵野書院
安部清哉（2014）「篁物語」『日本語学大辞典』朝倉書店
安部清哉（2017.3）「原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌

壇沈淪歌人群の長歌・和歌――九六一年から九八〇年頃か――」『学習院大学文学部研究年報』63
安部清哉（2018.3）「『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順――『篁物語』第Ⅰ部・第Ⅱ部共通の一典拠章段として――」学習院大学人文科学研究所『人文』16
安部清哉（2018.5）「挿入段落・附載説話という視点から見た『篁物語』の構成と形成――残る断続場面の「ふみ（書＝漢学）」という主題――」『学習院大学教職課程年報』4
安部清哉（2018.6）「係り助詞（ナム・ゾ・コソ）の四文体別変遷史から見た『篁物語』――源順原作説とも照らしつつ――」『国語と国文学』95―6
安部清哉（2019.a）「呼称から見た『篁物語』の段落構成――『せうと（兄）』と『男』の相補分布――」『人文』17（学習院大学人文科学研究所）
安部清哉（2019.3b）「贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』という〝つくり歌物語〟の創出」『文学部研究年報』65
安部清哉（2020）「京都大学文学研究科図書館所蔵本「篁物語」（影印）とその〝末尾有空白系統本〟の古態性」『人文』18
安部清哉（2021a）「変体仮名字母から見た一写本『篁物語』甲本――【附載】京都大学人文研究科図書館所蔵本「小野篁集」（影印）」『人文』19
安部清哉（2021b）「指示詞カ系派生語「かく」類語句と冒頭表現から見た平安前期物語『篁物語』」『（学習院大学）文学部研究年報』67
安部清哉（2022）「源順における漢から和」『人文』20
中村一夫（2022）「『篁物語』諸伝本の分類と古態性についての試論」『国士舘人文学』12、71―78.

ENGLISH SUMMARY

The Structure of Two Parts and Multiple Layers in "*The tale of Takamura*" (*"Takamura-Monogatari"* 『篁物語』): The Oldest Japanese Tale of the Two Parts Structure with "Independent Parrallel Stories and Connecting Briedge Capters"

ABE Seiya

In this paper, it is pointed out that the chapter and section structure of the "*The Tale of Takamura*" (『篁物語』, "*Takamura Monogatari*"), which was established in the early Heian period, formed a complex multi-layered structure consisting of two smaller tales, which is similar to the structure of the "*The Tale of Utsuho*" (『宇津保物語』*Utsuho Monogatari*) and "*The Tale of Genji*" (『源氏物語』*Genji Monogatari*). As the "*Takamura Monogatari*" is considered to have been established before the "*Utsuho Monogatari*" and the "Genji Monogatari", it can be pointed out that the complex structural setting of the "*Takamura Monogatari*" may have influenced the two longer stories by making them longer stories.

To explain the structure of "*Takamura Monogatari*", it is a short story in two parts: the first part, which consists of 16 chapters, and the second part, which consists of 7 chapters, for a total of 23 chapters overall. The protagonist is one man, Takamura, who is common to both of them. The two parts have a common theme, so that the whole is a single story.

In the middle of the 16 chapters in the first half of the story, there are a 'Parallel Storyline Chapters', consisting of five consecutive chapters that are independent of the rest of the storyline. Considering that the exclusion of these five chapters has little effect on the overall story, they can be interpreted as having been inserted separately at a later date.

In addition, although the stories in the first and second halves seem, at

first glance, to be independent in terms of content, the ghost of the female protagonist who dies in the first half appears on the scene at the end of the first half, and the ghost appears again in the middle of the second half. In other words, the ghost of the woman in the first half of the story also influences the story in the second half, which shows that the first half and the second half are not completely independent stories, but that the two are interrelated and united as one continuous story.

Therefore, the chapter in which the woman's ghost appears can be said to have the role of a 'Connecting Bridge Chapter' to connect the first half of the story with the second half of the story.

More interestingly, even if the chapter in which the female ghost appears is excluded from both the first and second halves of the chapter, both the first half and the second half of the story have their own coherent and comprehensive parts.

From that point of view, the chapter with the ghost is interpreted as an additional insertion after the main storyline of the first and second halves had been created, in order to link the first and second halves of the storyline.

Taken together, it can be seen that the "*Takamura Monogatari*" has a complex structure consisting of two independent main stories, a before and an after, a independent parallel stories with separate progressions in the first half, and "Connecting Bridge Chapters" connecting the first half and second halves.

Such a complex structure as this tale is the first of its kind in the history of Japanese literature.

Similar to this Takamura story, which consists of a unique structure, i. e. two or more independent story lines, a story that serves to link the two, and independent sub-stories that are separate and parallel in time to those stories, are "*The Tale of Utsuho*" and "*The Tale of Genji*". These works were established after the "*Takamura Monogatari*". Therefore, it can be assumed that the "*Takamura Monogatari*" influenced the later works "*The Tale of Utsuho*" and "*The Tale of Genji*", leading to the longer versions of these tales.

Key Words: *The Tale of Takamura*, "Independent Parallel Stories", "Connecting Bridge Chapters", Influence on "Tale of Genji", Two-Part Structure